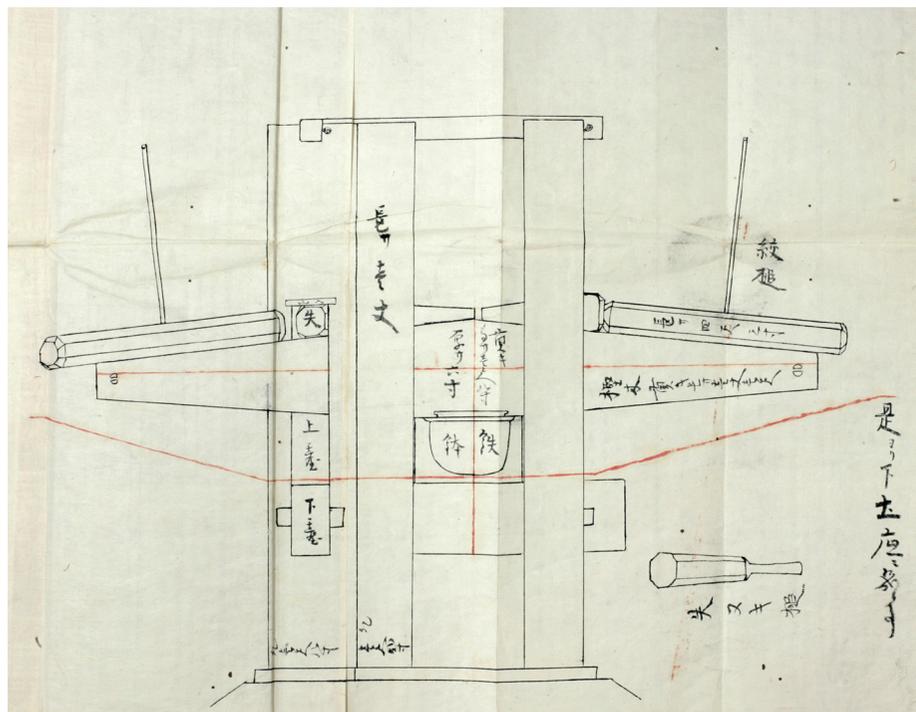


## 雄藩の成長（特産物 蠟〔ろう〕）



\* 毛利家文庫 58絵図649「製蠟板場道具絵図」

### 解説

江戸時代後半になると、諸藩は財政を立て直すために、地の利や特産物を生かした独自の改革を行いました。

長州藩では西回り航路の発達により海上交通や商品流通が盛んになったことを生かして、下関など藩内の港で商品の転売や倉庫業、金融業をおこなう越荷方（こしにかた）という機関を設けて利潤をあげました。

また、ろうそくや鬢付けに用いる蠟は当時の必需品でしたが、長州藩はそれを専売品として生産を奨励しました。長州藩の生蠟（きろう）は「一〇蠟（いちまるろう）」の名で大阪市場で高い評判を得ました。

写真は、櫛（はぜ）の実から生蠟を絞りたてる道具の図です。油絞りと同様、両方から「矢」とよばれるくさび状の木を「絞り槌」で打ち込んで圧搾し、中央の鉄鉢に受けます。この絵図には、蠟板場（蠟を生産する工場）で使われたそのほかの道具の図も多数描かれています。

\* 蠟にかぎらず、江戸時代の長州藩の産業について調べるには、「両公伝史料」が便利です。たとえば「忠正公伝 第一編（9）」（両公伝史料 1191）の第7章「毛利氏の産業」のなかには、米・菜種・綿実・藍・煙草・櫛実などについての藩の政策や生産・販売の記述があります。